

〔研究ノート〕

対人嫌悪の理由と対処の関係

－被嫌悪回避傾向を考慮して－

Correlations between Avoidance of "being disliked by others",
Characteristics of Disliked others, and Attendant Coping Patterns

河野和明*・羽成隆司**・伊藤君男*

Kazuaki KAWANO, Takashi HANARI and Kimio ITO

キーワード：対人嫌悪，被嫌悪回避，嫌悪対象者の特徴，嫌悪対象者に対する対処

Key words: interpersonal disgust, avoidance of "being disliked by others", coping pattern toward disliked person

要約

本研究では、対人嫌悪研究の一環として、嫌いになった対象者の特徴と対処との関連を検討するとともに、付加的に被嫌悪回避傾向と測定変数との関連を分析した。402名の大学生にもっとも嫌悪を感じるまたはもっとも苦手な他者1名の想起を求め、その人物に対して、対人苦手意識対処法尺度（山岸，2013）、対人的嫌悪感尺度（斎藤，2003）から選定した項目の評定を求めた。同時に、5種の感情評定および被嫌悪回避尺度（河野ら，2014）を実施した。被嫌悪回避尺度は、対象者に対する恐怖感情と有意な正の相関を示したが、対象者の特徴やほとんどの対処と有意な相関を示さなかった。「自分との相違」、「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」、「相手の主張過剰」、「相手の外見」、「相手の話し方」はいずれも回避的対処と正の相関があり、避けられやすいことが示された。特に「相手の自己中心性」がもっとも受け容れられにくいことが示唆された。一方、嫌いな理由が妬ましさや自分との類似である相手に対しては融和的な対処が取られることが示された。外見や話し方は、外面的な要因であるにもかかわらず、非融和的な対処を引き起こしている可能性が示唆された。

Abstract

This study aimed to investigate relations between characteristics of disliked others, and their attendant coping patterns in addition to the "avoidance of being disliked by others (ABD)"

scale. Four hundred and two college students were asked to recall one other person they most dislike, then to answer the ABD scale (Kawano et al., 2014), 5 feelings for the disliked person, short version of the interpersonal dislike scale (Saito, 2003) and short version of the coping pattern scale for "sense of nigate" (Yamazaki, 2013). The results showed that the ABD scale did not have significant correlation with most variables, except for significant positive correlation to fear of the disliked person. Dislike toward others which different from respondents, dislike toward others who have arrogance, dislike toward others who are selfish, dislike toward others who are over-assertive, dislike toward appearance and dislike toward a way of speaking had significant positive correlations with "avoidance" coping, causing person who have these characteristics to be avoided. From the total correlations, disliked selfish persons were thought to be coped with by expulsion. On the other hand, disliked person due to envy and a person disliked due to similarity were thought to be coped with in a reconciliatory way. In spite of superficiality of the factors appearance and way of speaking, these could elicit expulsive coping by others.

問題

われわれは他者に対して時に嫌悪を感じる。嫌悪は何らかの有害な対象から自身を守るために文化的進化的に発達したとの観点 (Rozin et al., 2000) に立てば、対人嫌悪は主に、広義の社会的立場を防衛する機能をもつ感情と捉えることができる。嫌悪を感じる相手、苦手意識を感じる相手の特徴は、これまで、齋藤 (2003) や日向野ら (日向野・小口, 1998; 日向野, 2008) の因子分析的研究によって示されてきた。これらの研究に共通して挙げられている特徴は、自己中心性、傲慢さ、偉そうな態度、相手への妬み、相手の魅力などである。たとえば、自己中心的な個人は互恵的関係を壊す可能性があるし、傲慢さや偉そうな態度を示して心理的に優越しようとする他者に接し続けることは長期的に社会的立場を毀損する可能性がある。また、あまりにも魅力的な他者がそばにいることは相対的に自分の社会的価値を下げることにつながるかもしれない。このような相手について何らかの対処をしないことには、広義の自己利益や社会的規範が直接的間接的に脅かされるだろう。

そこで人はこのような可能性に対して嫌悪感を発動し、早期に何らかの対処を行う準備をしていると解釈できる。対人ストレス全般の対処については、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングといった対処方略が見いだされている (加藤, 2000)。しかし、嫌悪対象者に特化した対処の研究は少ない。

その中で、山崎（2013）は、苦手な相手への対処法を検討し、相手を受容して関わろうとする「受容」、相手をなるべく回避して最低限の関わりにとどめる「回避」、相手を拒否して関わらない「拒否」、相手に妥協して自分の苦手な気持ちを出さずに関わる「妥協」、相手の立場が強く相手にしたがって行動する「従属」、相手に言いたいことは我慢せずに主張する「主張」の、6因子を見いだした。これらの対処は、想起させたもっとも苦手な人物に対する評定から析出されたものだが、その対象者が嫌いになった原因や対象者のもつ嫌いな特徴によってどの対処が用いられるかが異なると予想される。

一方、嫌われることを避ける傾向（以下、被嫌悪回避傾向と呼ぶ）について、河野ら（2014）は、尺度を構成したうえで、自分を嫌っている他者の数、自分に好意をもっている他者の数、自分が嫌っている他者の数、友人数、親友数、コミュニケーション頻度についての自己報告と、この尺度得点とが有意な相関をもたなかったことを報告した。一方、好意の互惠性（Berscheid, 1985）から推しても、自分のことを嫌っている他者に対しては好きになれないことが一般的である。そのため、「他者から嫌われたくない」と考えている人は嫌悪対象者に対してもあからさまに嫌いなそぶりを見せないように努めるといったように、対処に関する特定の傾向が生じるかもしれない。このことから、被嫌悪回避傾向が嫌悪対象者への対処方略と関連する可能性がある。

そこで、本研究では質問紙調査によって予備的な検討を行う。まず、被嫌悪回避について、主として嫌悪対象者の特徴および嫌悪対象者に対する対処との関連を調べる。その後、嫌悪対象者の特徴によって対処がどのように異なるかを見ていく。その際には、嫌悪対象者に対する感情評定も取得し、被嫌悪回避、感情評定、嫌悪対象者の特徴、嫌悪対象者に対する対処について相関分析を行うとともに、付加的に性差を検討する。

方法

対象者 東海地方の学生、計402名（男性123名、女性279名）を調査対象とした。平均年齢は19.71歳（年齢範囲18～24歳、SD=1.13）であった。

質問紙 調査参加者に対して、同性または異性の実在人物の想起を求め、続いて、その人物に対する感情や認知の評定を要請した。その人物として、嫌悪を感じる人物（以下、嫌悪人物）と感情的に中性の人物（以下、中性人物）とが指定されており、順序効果を相殺するために、[嫌悪人物-中性人物]の順と[中性人物-嫌悪人物]の順の質問紙を用意した。このため、質問紙で想起させる人物の組み合わせによって、「同性嫌悪人物-同性中性人物」「異性嫌悪人物-異性中性人物」「同性中性人物-同性嫌悪人物」「異性嫌悪人物-異性中性人物」の4種が作成され、これらのうちのいずれかひとつが調査参加者に割当たると無作為に配布された。なお、中性人物に対する評

定や、中性人物と嫌悪人物との評定値比較については別報とし、本報告では言及しない。質問紙は以下の項目を含む多数の項目から構成されていた。下記以外の他の心理尺度等も投入されたが、本報告ではそれらに言及しない。

被嫌悪回避尺度 他者から嫌われることを避けようとする傾向を測定するために、河野ら(2014)の被嫌悪回避尺度を投入した。全10項目に対して5件法(1=まったくあてはまらない~5=まったくあてはまる)によって評定を求めた。

対象者に対する感情 友人関係における典型的な肯定的感情として「尊敬」「愛情」を、同じく否定的な感情として「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」を選定し、想起した対象人物に対する各感情について7件法(1=まったく感じない~7=非常に感じる)で強度を測定した。

対人的嫌悪感尺度 嫌悪人物の嫌悪的な特徴を測定するために斎藤(2003)が開発した対人的嫌悪感尺度を投入した。この尺度は、嫌いな他者の特徴を8種(「自分との相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」)の下位尺度から測定するものである。それぞれの下位尺度は、9項目、8項目、8項目、12項目、6項目、4項目、3項目、3項目から構成されていたが、本研究では回答時の負担を考慮し、各下位尺度の因子負荷量の大きい項目から5項目を採用した(構成項目数が5未満の「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」の各下位尺度のみ全項目を採用)。各項目について6件法(1=まったくそう思わない・まったくあてはまらない~6=まったくそう思う・まったくあてはまる)で評定を求めた。

対人苦手意識対処法尺度 嫌悪人物に対する対処方略を測定するために山崎(2013)が開発した対人苦手意識対処法尺度を投入した。この尺度は、苦手な人物とのつきあい方と苦手な人物との今後のつきあい方について、6種(「受容」「回避」「拒否」「妥協」「従属」「主張」)の下位尺度から測定するものである。それぞれの下位尺度は、14項目、10項目、8項目、8項目、4項目、3項目から構成されていたが、本研究では対人嫌悪尺度と同様、回答時の負担を考慮し、各下位尺度の因子負荷量の大きい項目から5項目を採用した(構成項目数が5未満の「従属」「主張」の各下位尺度のみ全項目を採用)。各項目について6件法(1=まったくそう思わない・まったくあてはまらない~6=まったくそう思う・まったくあてはまる)で評定を求めた。

結果と考察

回答拒否や配布の偶然の偏りによって、前述した「同性嫌悪人物-同性中性人物」「異性嫌悪人物-異性中性人物」「同性中性人物-同性嫌悪人物」「異性中性人物-異性嫌悪人物」の各質問紙の回答者はそれぞれ、106名（男性30名、女性76名）、93名（男性35名、女性58名）、99名（男性29名、女性70名）、104名（男性29名、女性75名）となった。今回の分析では、異性と同性の対象人物をプールした。したがって、設定した対象人物には男女おおよそ同数が含まれていた。

測定変数の性差 被嫌悪回避尺度、対象者に対する5種の感情、対人的嫌悪感尺度の下位尺度8種、対人苦手意識対処法尺度の下位尺度6種、それぞれの平均値と標準偏差を男女ごとに示す（表1）。対人的嫌悪感尺度の先行研究（斎藤，2003）では、「自分との相違」「相手への妬み」「相手の傲慢さ」「相手の話し方」において回答者の有意な性差が得られている。一方、対人苦手意識対処

表1．各測定変数の平均値、標準偏差、データ数、および性差

	男性			女性			有意差
	平均	SD	n	平均	SD	n	
1. 被嫌悪回避尺度	27.67	8.61	123	28.27	7.71	275	ns
2. 尊敬	2.09	1.55	116	2.17	1.54	269	ns
3. 愛情	1.86	1.40	116	1.86	1.32	269	ns
4. 恐怖	2.79	2.00	116	2.96	1.86	268	ns
5. 軽蔑	4.41	2.03	116	4.35	1.84	269	ns
6. 嫌悪	4.96	1.97	116	4.84	1.90	269	ns
7. 自分との相違	23.75	5.40	118	23.89	4.80	275	ns
8. 相手への妬み	14.23	5.71	118	13.87	5.59	272	ns
9. 相手の傲慢さ	19.67	6.70	119	19.72	6.90	274	ns
10. 相手の自己中心性	20.32	6.69	117	19.94	6.63	275	ns
11. 相手の主張過剰	18.50	6.16	117	19.24	6.37	273	ns
12. 自分との類似	9.42	4.26	118	9.03	4.03	272	ns
13. 相手の外見	10.06	4.53	116	10.00	4.58	274	ns
14. 相手の話し方	11.89	4.54	118	12.29	4.43	274	ns
15. 受容	12.57	6.03	115	13.41	6.08	274	ns
16. 回避	22.71	6.61	115	24.46	5.67	274	*
17. 拒否	16.01	7.43	118	14.59	7.36	274	ns
18. 妥協	18.18	5.66	118	18.56	5.44	275	ns
19. 従属	10.02	4.80	118	9.51	4.44	273	ns
20. 主張	9.63	4.29	116	9.00	4.36	274	ns

* $p < .05$

2-20は対象人物に対する評定；2-6は各感情の単項目評定、7-14は対人的嫌悪感尺度の下位尺度、15-20は対人苦手意識対処法尺度の各下位尺度

表2. 被嫌悪回避得点、嫌悪対象者に対する感情と他の測定変数との相関係数：上段は男性回答者、下段は女性回答者の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
1. 被嫌悪回避尺度																				
2. 尊敬	.01																			
	.02																			
3. 愛情	.69**																			
	.58**																			
4. 恐怖	.27**	.21*																		
	.16**	.15*																		
5. 軽蔑	-.03	-.24*	.11																	
	-.03	-.27**	.22**																	
6. 嫌悪	-.10	-.29**	-.21*	.25*	.69**															
	-.01	-.28**	-.21**	.20**	.76**															
7. 自分との相違	.01	-.36**	-.38**	.10	.38**	.31**														
	-.01	-.21**	-.26**	.06	.26**	.26**														
8. 相手への妬み	.08	.51**	.42**	.30**	-.19	-.22*	-.18													
	.10	.51**	.41**	.22**	-.17**	-.14*	-.16*													
9. 相手の敬虔さ	-.10	-.29**	-.28**	.20*	.31**	.49**	.43**	-.15												
	-.01	-.24**	-.16*	.13*	.23**	.28**	.34**	-.03												
10. 相手の自己中心性	-.03	-.37**	-.35**	.02	-.42**	.42**	.47**	-.23*	.69**											
	-.03	-.37**	-.24**	.01	.35**	.31**	.36**	-.16*	.62**											
11. 相手の主張過剰	.18	.03	-.05	.16	.15	.16	.24*	.15	.46**	.24*										
	.10	.01	-.03	.20**	.12	.12	.24**	.26**	.48**	.41**										
12. 自分との類似	.00	.25*	.26*	.10	-.04	.05	-.26*	.42**	.02	-.03	.08									
	-.02	.21**	.23**	.09	-.01	.04	-.29**	.30**	-.04	.03	.02									
13. 相手の外見	-.07	-.30**	-.30**	.02	.35**	.34**	.23*	-.27**	.54**	.56**	.24*	.02								
	-.13*	-.36**	-.38**	-.10	.23**	.25**	.32**	-.32**	.28**	.33**	.33**	.02	-.20**							
14. 相手の話し方	-.01	-.34**	-.41**	.03	.33**	.40**	.37**	-.34**	.62**	.62**	.35**	-.08	.72**							
	-.07	-.28**	-.32**	.05	.23**	.35**	.39**	-.25**	.42**	.42**	.22**	-.23**	.61**							
15. 受容	-.09	.31**	.39**	.13	-.00	-.11	-.01	.45**	-.15	-.22*	.02	.35**	-.30**	-.29**						
	-.02	.47**	.44**	.17*	-.19**	-.26**	-.21**	.39**	-.05	-.14*	.14*	.22**	-.43**	-.29**						
16. 回避	.08	-.34**	.55**	.02	.15	.32**	.37**	-.23*	.37**	.33**	.22*	-.02	.39**	.48**						
	.02	-.38**	.52**	.06	.31**	.35**	.37**	-.28**	.25**	.34**	.16*	-.20**	.43**	.42**	-.39**					
17. 拒否	.03	-.28**	-.40**	-.04	.10	.22*	.23*	-.20*	.35**	.35**	-.02	-.07	.45**	.44**	.63**					
	-.08	-.34**	-.33**	-.07	.25**	.25**	.15*	-.35**	.07	.27**	-.04	-.19**	.52**	.37**	.45**					
18. 妥協	.12	.06	.05	.14	.09	.14	.28**	.27**	.17	.10	.30**	.37**	.11	.12	.39**	.28**	.03			
	.09	.06	.05	.19**	.06	.08	.17**	.18**	.18**	.10	.25**	-.01	-.12	.05	.23**	.23**	-.23**			
19. 従属	.12	.33**	.28**	.38**	-.00	-.03	.02	.58**	.08	-.06	.24*	.32**	-.06	-.09	.56**	.07	-.15	.47**		
	.19**	.36**	.21**	.31**	-.13*	-.13	-.09	.37**	-.02	-.11	.23**	.13	-.24**	-.09	.49**	-.11	-.19**	.47**		
20. 主張	-.12	.07	.05	.08	.06	.05	.12	.01	.06	.12	.04	-.10	-.15	.05	.39**	-.05	-.12	-.08	.05	
	-.06	-.02	.05	-.09	.08	.02	.03	.02	.05	.23**	.03	-.11	-.08	.09	.24**	.00	-.03	-.02	.02	

男性回答者は n=99, 女性回答者は n=239 ; * $p < .05$, ** $p < .01$

2-20は対象人物に対する評定、2-6は各感情の単項目評定、7-14は対人的嫌悪感尺度の下位尺度、15-20は対人苦手意識対処法尺度の各下位尺度

法尺度の先行研究（山崎，2013）においては、対人苦手意識対処法尺度のすべての下位尺度に性差が見られていない。本研究においては、すべての測定変数について、「回避」的対処 ($t(187.90) = 2.48, p < .05$) 以外に回答者の性による有意な差は見られなかった。これらのことは、測定や尺度項目の設定によって、特に対人的嫌悪感尺度において性差の検出が一部不安定となることがかかわれるとともに、対人嫌悪に関連する全般的な感情や対処に極端な性差は少ないことを示唆する。

測定項目間の相関 測定変数間の相関係数行列を男女ごとに示す（表2）。

(1) **被嫌悪回避尺度** 被嫌悪回避尺度得点は男女とも嫌悪対象者に対する「恐怖」と有意な正の相関、女性においてのみ「相手の外見」と有意な負の相関、同じく女性においてのみ「従属」的対処と有意な正の相関を示した。その他の変数とは有意な相関はみられなかった。「恐怖」は対象者を脅威とみなしていることを示唆する。すなわち、「嫌われたくない」という心理的傾向は、対象者の脅威認知と関連している可能性がある。女性において外見による嫌悪および従属的な対処方略とやや関連している可能性があるものの、被嫌悪回避は総じて特定の嫌悪特徴や対処方略との関連が薄いことを示す。この結果は、対人嫌悪に関連したさまざまな自己報告と被嫌悪回避尺度得点と有意な相関を持たないことを示す結果（河野ら，2013）の知見をさらに補強するものである。

(2) **感情評定** 対象人物に対する5種の感情間では、予想されるように、対象者に対する肯定的感情である「尊敬」と「愛情」との間に比較的高い正の相関が、否定的感情である「軽蔑」と「嫌悪」との間に比較的高い正の相関がそれぞれみられた。また、「尊敬」「愛情」と「軽蔑」「嫌悪」との間には有意な負の相関がみられた。すなわち、これらはおおむね互いに相反する感情であると言える。一方、「恐怖」は他の4種の感情評定のほとんどと有意な正の相関をもっており、対象者に対する肯定的側面と否定的側面の両方と関連することが示唆される。

(3) **感情評定と対人的嫌悪感尺度** 5種の感情と対人的嫌悪感尺度の下位尺度との相関を見ても、「尊敬」と「愛情」は、ほぼ類似した相関を示した。具体的には、この2種の感情は「相手への妬み」および「自分との類似」と有意な正の相関を、「自分との相違」「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」「相手の外見」「相手の話し方」とは有意な負の相関を示した。相手に対する肯定的な感情は、羨ましい相手や自分に似ている相手に対して生じているが、それ以外の嫌いな理由は「相手の主張過剰」を除いて強ければ強いほど肯定的感情は低いと言える。一方、「軽蔑」と「嫌悪」も対人的嫌悪感尺度の各下位尺度と類似した相関を示した。同時に、「尊敬」と「愛情」では有意な正の相関があった「自分との類似」について相関がほとんど見られないことを除き、「軽蔑」と「嫌悪」は「尊敬」と「愛情」とほぼ逆の相関を示した。相手の主張過剰には「尊敬」「愛情」

と同様に有意な相関が見られなかった。したがって、相手に対する否定的な感情は、妬ましい相手に対してのみ低いが、それ以外の嫌いな理由は「相手の主張過剰」と「自分との類似」を除いて強ければ強いほど否定的感情が高いと言える。これらに対して「恐怖」感情は様相が異なっており、「相手への妬み」と「相手の傲慢さ」については男女いずれも、「相手の主張過剰」については女性のみ、有意な正の相関がみられただけだった。

(4) 感情評定と対処法尺度 同じく、5種の感情と対人苦手意識対処法尺度の下位尺度との相関を見ると、「尊敬」「愛情」の2感情は「受容」「従属」のそれぞれとの間に有意な正の相関、「回避」「拒否」のそれぞれとの間に有意な負の相関が見られた。これら2種の肯定的感情は対処との関連がおおむね同一と考えられる。一方、「嫌悪」は男女とも「回避」「拒否」の対処と正の相関を示し、対象者を嫌っているほど回避的・拒否的対処となることが示された。「嫌悪」と「受容」の間には女性においてのみ有意な負の相関が見られた。「軽蔑」は性によって対処との相関が異なっており、女性は「受容」と負の相関、「回避」と正の相関、「拒否」と正の相関が見られ、これらは「嫌悪」と共通する相関の特徴であった。これに対し男性の「軽蔑」には有意な相関が見られなかった。「恐怖」は男女とも「従属」と有意な正の相関をもつ点が特徴的であった。

(5) 対人的嫌悪感尺度 対人的嫌悪感尺度の下位尺度間の相関を見ると、「自分との相違」は「相手への妬み」と「自分との類似」を除いてすべての他の尺度と有意な正の相関をもっていた。「相手への妬み」は、「相手の自己中心性」と負の相関、女性のみ「相手の主張過剰」と正の相関、「自分との類似」に正の相関、「相手の外見」「相手の話し方」に負の相関がみられた。「相手の傲慢さ」は「相手の自己中心性」「相手の主張過剰」「相手の外見」「相手の話し方」と有意な正の相関をもっていた。「相手の自己中心性」は「相手の主張過剰」「相手の外見」「相手の話し方」と有意な正の相関をもっていた。「相手の主張過剰」は男性のみ「相手の外見」と、男女とも「相手の話し方」と有意な正の相関をもっていた。「自分との類似」は女性のみ「相手の外見」「相手の話し方」と有意な正の相関をもっていた。全体に、「相手の傲慢さ」と「相手の自己中心性」、「相手の外見」と「相手の話し方」はおおむね類似した相関の様相を示しており、「相手への妬み」は「相手の自己中心性」「相手の外見」「相手の話し方」と有意な負の相関をもっている点で他の下位尺度と際違って異なっていた。

(6) 対人苦手意識対処法尺度 対人苦手意識対処法尺度の下位尺度間相関を見ると、男女とも、「受容」-「妥協」、「受容」-「従属」、「受容」-「主張」、「回避」-「拒否」、「回避」-「妥協」、「妥協」-「従属」に有意な正の相関、「受容」-「回避」、「受容」-「拒否」に有意な負の相関が示された。また、「拒否」-「妥協」、「拒否」-「従属」には女性のみ有意な負の相関が見られた。これらの相関は、サンプルサイズの違いに起因する有意性の違いや係数の細部を除き、先行研究（山崎, 2013）で示された結果とおおむね類似していた。しかし、先行研究で男女に示された「拒否」-「主張」の正の相関、女性のみ示された「従属」-「主張」、「従属」-「回避」、「妥協」-「主

張」の負の相関が本結果では見られなかったこと、本研究で男女に見られた「受容」-「主張」の正の相関が先行研究では示されなかったことが異なる点であった。これらの違いの原因は不明であるが、大学等の特徴による回答者の特性の違いが反映された可能性もあろう。

(7) 対人的嫌悪感尺度と対人苦手意識対処法尺度 さまざまな嫌われる特徴がどのような対処と関連しているか検討するために、対人的嫌悪感尺度の下位尺度と対人苦手意識対処法尺度の下位尺度との間の相関を検討した。「自分との相違」は男女とも「回避」および「拒否」と有意な相関を示した。また、「自分との相違」は女性のみ「受容」と有意な負の相関、男性のみ「妥協」と有意な正の相関を示した。自分と違う人は今後も考え方や意見が衝突する可能性が高いため一般に避けられる傾向にあると考えられる。「相手への妬み」は男女とも「受容」「妥協」「従属」とそれぞれ有意な正の相関を示す一方、「回避」「拒否」とは有意な負の相関を示した。これらの結果は、妬ましい相手には融和的な対処がとられることを示唆している。妬みは、相手の所有物、社会的立場、パーソナリティ特性、能力、実績等、何らかの資源が自分よりも勝っているという認知に基づく感情と考えられる（たとえば概説は、澤田，2008）。そういった優れた他者との関係を維持することにはメリットが生じる場合が多いだろう。このことが受容的な対処を促す背景にあると思われる。「相手の傲慢さ」は男女とも「回避」と正の相関を示したが、男性のみで「拒否」と、女性のみで「妥協」とそれぞれ正の相関を示した。「相手の自己中心性」は男女とも「回避」および「拒否」と、女性のみ「主張」と有意な正の相関を示す一方、「受容」とは男女とも負の相関を示した。嫌われる特徴中、自己中心性は最も非融和的な対処を引き起こすもののひとつであると言える。「相手の主張過剰」は男女とも「回避」「妥協」「従属」と有意な正の相関を示した。主張が強い人は避けられる一方で許容される側面もあることを示唆する。「自分との類似」は男女とも「受容」と正の相関をもっていたが、女性のみ「回避」「拒否」と有意な負の相関、男性のみ「妥協」「従属」と有意な正の相関をもっていた。男性は、たとえ嫌いであっても自分と似ていると認知する人を受け入れやすいと考えられる。「相手の外見」は男女とも「受容」と有意な負の相関、「回避」「拒否」と有意な正の相関をもっており、女性のみ「従属」と有意な負の相関をもっていた。同様に「相手の話し方」は男女とも「受容」と有意な負の相関、「回避」「拒否」と有意な正の相関をもっていた。「相手の外見」および「相手の話し方」は外面的な特徴であるにもかかわらず非融和的な対処を明確に引き起こすことが示された。外見は単に容姿の問題であると考えられると、対処として加罰的すぎるように思われる。しかし、「相手の外見」は「尊敬」「愛情」の肯定的感情と負の相関、「軽蔑」「嫌悪」の否定的感情と正の相関、「自分との相違」「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」とそれぞれ正の相関を示しており、かなり人格的要素を含んだ特徴の認知と推定される。これについては、一般的な身体的魅力以外のどのような要因が相手の容姿を嫌悪させるようになるか検討していく必要がある。この問題は、対象人物との身体接触を回避する傾向である接触回避（Kawano et al., 2011；河野ら，2012）の形成過程との関連も予想され、今後

の重要な課題となる可能性がある。

まとめと今後の課題

本研究で用いたほとんどの測定変数には性差がなく、対人嫌悪に関する心理行動的側面に男女の違いが少ないことが示唆された。被嫌悪回避傾向は対象者に対する恐怖感情と関連しており、女性においては従属的な対処と関連している可能性が示唆された。尺度間の相関から、自分と相違する相手、傲慢な相手、自己中心的な相手、主張過剰な相手はいずれも避けられ、特に自己中心的な相手がもっとも受け容れられにくいことが示唆された。一方、嫌いな理由が妬ましさや自分との類似である相手に対しては融和的な対処がとられると考えられた。外見や話し方が嫌な相手は、外面的な要因であるにもかかわらず、かなり非融和的な対処を引き起こす可能性が示唆された。

なお、本研究と先行研究の結果には一部差異が見られた。この原因は、尺度項目以外の測定のワーディングの違いや、本研究で尺度項目数を一部削減して使用していることによる可能性がある。これについては、基本的な測定方法をより吟味していくことが望ましい。また、回答者の性比に偏りがあったことが、相関の有意性検定に基づく性ごとの特徴の解釈を難しくした面がある。さらに本調査は、嫌悪対象人物として男性と女性を設定した上で結果をプールして解析している。今後は、回答者数を増やして男女の回答数を均等化するとともに、嫌悪対象者の性による対処の違いを検討することが当面の課題となろう。その上でさらに、多変量解析等を用いてより詳細な分析を行っていく必要がある。

本研究によって嫌悪対象者の特徴による対処の違いの概要が示された。対人嫌悪が互恵性の維持に寄与する機能をもつ（トリヴァース, 1991; Trivers, 1971）という観点から、これらの対処方略が利他性や利害調整にどのように影響しているか、今後の検討が期待される。

引用文献

- Berscheid, E., 1985. Interpersonal attraction. In G. Lindzey & E. Aronson (eds) *The Handbook of Social Psychology*, pp. 413-484, New York: Random House.
- 日向野智子, 小口孝司, 1998. 青年期の対人関係における苦手意識. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1: 43-62.
- 日向野智子, 2008. 人を苦手になる. In: 加藤司・谷口弘一編, 対人関係のダークサイド, 北大路書房, pp.76-88.

- 加藤司, 2000. 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成. 教育心理学研究, 48 : 225-234.
- Kawano, K., Hanari, T., Ito, K., 2011. Contact avoidance towards people with stigmatic attributes: seen from the opposite aspect of mate choice. *Psychological Reports*, 109: 639-648.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2012. 接触回避尺度の尺度特性. 東海学園大学研究紀要, 17 : 155-161.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2014. 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差. 東海学園大学研究紀要, 19, 155-165.
- Rozin, P., Haidt, J., McCauley, C. R., 2000. Disgust. In M. Lewis and J. M. Haviland-Jones (eds.) *Handbook of Emotions (2nd Edition)*. pp.637-653. New York: Guilford Press.
- 斎藤明子, 2003. 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究. 九州大学心理学研究, 4 : 187-194.
- 澤田匡人, 2008. 人をうらやむ. In : 加藤司・谷口弘一編, 対人関係のダークサイド, 北大路書房, pp.29-45.
- トリヴァース, R. (中嶋康裕・福井康雄・原田泰志 訳), 1991. 生物の社会進化. 産業図書.
- Trivers, R., 1971. The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46: 35-57.
- 山崎千尋 2013 対人関係で生起する苦手意識への対処の分類 - 大学生を対象とした研究 -. 北星学園大学大学院社会福祉学研究所 北星学園大学大学院論集, 16, 137-148.